

(牧師室より)

[渋沢の宗教観]

渋沢栄一を主人公としたNHK大河ドラマが始まったことです。渋沢を生んだ埼玉県深谷市は大いに盛り上がっていることでしょう。以前同地にお住いの齋藤富士雄兄に渋沢の生家や記念館を案内頂いたことです。銀行の設立等、500近い企業の創設に関わるスケールの大きな人、また貧しい人々のための東京療育院の維持に心血を注ぐ愛の人、誠に偉大な人物です。その実践を導いたのは孔子の教えでした。「余は青年時代より儒教に依って立ち、論語は余にとってバイブルである」と述べています。ここから次の宗教観が見られます。「余は昔から宗教と名のつくものは一切嫌いである。耶蘇教はもちろんのこと、東洋教たる仏教すらも好まない(中略)。もちろん耶蘇教にしろ仏教にしろ、その根本的教義の悪いはずはないが、これを布教する政略が気に喰わない」。「宗教として、はた経文としては耶蘇の教えがよいのであろうが、人間の守る道としては孔子の教えがよいと思う(中略)。孔子に対して信頼の程度を高めさせるところは、奇蹟が一つもないという点である。キリストにせよ、釈迦にせよ、奇蹟がたくさんある」(以上の引用『渋沢百訓』より) 渋沢は宗教に一定の評価を示しつつ、そこに不合理なるものを見て躓いているようです。これは又多くの日本人の抱く思いかもしれませぬ。復活といった奇蹟をどう受けとめるか、ということですね。